

新型インフルエンザの理解と対応のために —ほんとうは怖い?! インフルエンザ—



東京女子医科大学八千代医療センター

感染対策室長 林 北見
発達小児科 科長



今年5月に始まった新型インフルエンザ（ブタインフルエンザ）の流行は、一旦終息かと思われましたが、7月に入り再び流行拡大の気配を示しており、まだまだ気を抜けない状況が続いております。一方、徹底した水際検疫の実施などは、振り返ってみると過剰な対策であったのではないかと、この意見も聞かれ、懸念されたような重症化する患者さんも少なく、竜頭蛇尾に終わった感も拭えません。それでは、今後にも教訓を残さなかったのでしょうか？ トリインフルエンザ感染拡大の危険が無くなったわけではありません。秋以降のインフルエンザ流行期を控え、もう一度インフルエンザについて、その問題点と対応方法を整理しておく必要があると思います。

インフルエンザは何が怖いのか

毎年冬から春にかけて流行するインフルエンザを「季節性インフルエンザ」とよび、今回流行したブタ由来インフルエンザや、東アジアで小規模な発生を認めているトリ由来インフルエンザを「新型インフルエンザ」とよびます。

季節性インフルエンザは毎年多くの方が罹りますが、多くは3-4日で解熱する比較的軽症で経過する病気です。「弱毒性」と分類されますが、お年寄りでは肺炎を起こすことも希ではなく、老人ホームなどで集団発生し、多い年には年間で1,000人を超える死亡者数が報告されていますし、その他に肺癌や糖尿病の患者さんでインフルエンザをきっかけとして亡くられる方もおられます。

また、幼児ではけいれん発作や意識混濁をきたし、死亡や重度の後遺症を残すインフルエンザ脳症が心配されます。その他にも、心臓病や呼吸器の病気など健康に弱点をもつ方にとって、インフルエンザは決して軽い病気ではありません。

一方、新型インフルエンザについては、「強毒性」である事が懸念され、厳重な検疫や隔離が行われることになりました。幸い、ブタ由来インフルエンザについては「弱毒性」であったようで、重症化する方は少数でした。しかし、トリ由来インフルエンザでは死亡率も高く、「強毒性」と考えられています。1920年代に流行した「スペイン風邪」は「強毒性」であったと考えられており、健康な若年層、成人にも多くの死者が見られました。



東京女子医科大学

八千代医療センター

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY YACHIYO MEDICAL CENTER

